

# 親の子どもへの期待と問題解決パターンとの関連

森川夏乃\*

## 問題と目的

親からの期待は、子どもの学習行動や学業成績 (Briley, Harden, & Tucker-Drob, 2014; Piquart & Ebeling, 2020)、適応 (渡部・新井・濱口, 2012; 渡部・濱口・新井, 2014)、生活満足感や精神的健康 (藤目・東條・鈴木, 2008; 春日井, 2014) など様々な側面に影響を及ぼす。しかし青年は、親が抱いているよりも親からの期待を感じておらず、青年と親の間にはずれがあることが示唆されている (池田, 2018)。特に青年期は、自己期待と親からの期待との間に質的・量的なずれを感じやすいという指摘もあり (山口, 1989)、期待をされる子ども視点と、期待をする親視点は分けて検討する必要があるだろう。

親の期待に着目した場合、親は子どもに対して学業・進路、人間的成長、対人関係形成、社会的適応といった領域の期待を抱いている (中山, 1992; 池田, 2018)。中でも、子どもの学業成績と親の子どもへの期待との関連について検討されており、学業達成において親が子どもに期待を示すことの効果の大きさが示唆されている (例えば Froiland & Davison, 2014; Piquart & Ebeling, 2020)。そして、子どもに対する学業・進路への期待は、子どもへの関与を介して学業成績に反映されることが示されている (Castro, et al., 2015; Englund, et al., 2004)。

しかしながら従来の研究では、親が子どもに抱く期待は、主に子どもの学業・進路期待に焦点が当てられていた。そのため、親の学業・進路期待による効果は明らかにされているものの、他領域で親が抱く期待が、子どもにどのように影響するかは明らかにされていない。一方で子ども視点の研究においては、親から

の人間性への期待が励みとなり積極的行動につながる (春日・宇都宮, 2011) や、学業や進学、就職期待だけでなく、社会への適応期待も子どもの完璧主義傾向と関連すること (河村, 2003) が指摘されている。このことから、学業・進路以外の期待もまた、子どもへの関わり方に反映され、子どもに影響していることが推察される。期待と子どもへの関わりとの関連を明らかにすることで、子どもに対して否定的な影響が生じている関わりの場合、親の期待に介入することで関わりが変容することも考えられる。

特に子どもに問題が生じた場合、子どもへの期待によって関わり方はどうなるのであろうか。例えば松本 (2014) は、子どもが不登校状態となった母親は、始めは従来の価値観の中で子どもの状態を受容できない葛藤に苦しんでいることを報告している。また、それまでとは異なる子どもの姿を目の当たりにし、衝撃を受け動揺したり絶望的になることも報告されている (前田・鈴木, 2020; 森川, 2022)。だが、次第にこれまでの価値観や否定的子ども観から、肯定的子ども観への転換が図られることで、親子の関係性が再構築されていく (松本, 2004)。子どもが問題を呈した時に親が直面する、従来の子どもへの見方と現状の姿とのギャップとは、親が抱いていた子どもへの期待と現実とのギャップであるとも捉えることができるだろう。不登校といった問題に直面した際、親は従来の子どもへの期待を修正し、現在の子どもを受け入れていく心理的変容が求められること、それに伴い関わりも変容していくことが推察される。子どもが問題を呈した際、どのような期待により親がどのような関わり方をするのかを明らかにすることは、親に対する介入の

一助となるだろう。

しかしながら、子どもが問題を呈した際の、親の子どもへの期待と関わり方との関連は明らかにされていない。そこで本研究では、母親が子どもに抱く期待と問題解決パターンとの関連について検討する。特に、子ども像の揺れを経験することが報告されている不登校という問題を取り上げる。具体的には、不登校初期に見られやすい身体愁訴を訴えている状態を想定してもらい、抱いている期待によって、母親の問題解決パターンがどのように異なるかを探索的に検討する。

## 方法

### (1) 質問紙の構成

1) 基礎情報：回答者の年齢、子どもの年齢、家族構成

2) 子どもへの期待：春日・宇都宮 (2011) および春日ら (2014) が作成した「子どもへの期待に関する質問項目」を使用した。本来この尺度は、子どもが認知する親の期待を問う尺度で「人間性期待」、「進路期待」、「よい子期待」の3因子から成る。著作者の同意を得たうえで教示を一部改変し、親の子どもに対する期待について尋ねた。教示文は次のとおりである。「普段の、あなたのお子さんに対する考えをお聞きします。以下に挙げる質問について、最も当てはまるものをお選びください。」質問項目は、「人に優しくしてほしい」、「ほかの子と比較して優れてほしい」、「いい高校・大学に行ってほしい」といった30項目で、「1当てはまらない」から「5当てはまる」の5件法で回答を求めた。

3) 問題解決パターン：家族の問題解決パターン尺度 (狐塚, 2011) を、著作者の同意を得たうえで改変して用いた。この尺度は、家族に問題が生じた際の取り組みや対処行動を問う尺度であり、「共感型」、「強制・対立型」、「協調型」、「落胆・回避型」、「子ども主導型」の5因子から成る。「あなたに何か問題が起こった時、あなたの家族ではその問題にどのように取り組みますか」という教示文に続き、問題の例として病気、学業、対人関係といった例が示されている。本研究では、子どもが問題を呈している状態として不登校の初期状態における関わり方を調査することが目的であるため、「Aさんは、この2か月、腹痛や頭痛を訴えることが続いています。学校にはなんとか行きますが、保健室に行ったり、早退することが多くなりました。先週、Aさんと母親はX内科に行ってみました。身

体的な異常は認められないと言われました。しかし、その後も、腹痛や頭痛の症状は続いています。」と提示した。そして、「あなたのお子さんがAさんのような状態になってしまったと想像してみてください。その時、あなたはこの状況に対してどのような反応や対応をしますか。」と教示文を改変して用いた。質問項目は、「何が原因かを話し合う」、「子どもの話をきく」といった30項目で、「1全くあてはまらない」から「6非常にあてはまる」の6件法で回答を求めた。

4) 操作チェック：3) で提示した身体不調を訴える子どもの状態をどれくらい想定できたかについて、「1全く想定できなかった」、「2あまり想定できなかった」、「3やや想定できた」、「4とても想定できた」の4件法で回答を求めた。

### (2) 手続きおよび調査協力者

株式会社マクロミルに依頼し、インターネット調査を実施した。

まず、スクリーニングを実施し、同居する高校生の子どもを持つ母親を抽出した。抽出された者に対してアンケートを配信し、アンケートの冒頭の説明文を読み同意した者が回答に進んだ。そして目標数の500人から回答を得た時点で調査を打ち切った。その結果、高校生の子どもを持つ母親516名から回答が得られた。

そのうち、操作チェックにおいて、「1全く想定できなかった」と回答した36人を省いた480名 (平均年齢48.81歳、標準偏差4.38) を分析に用いた。

### (3) 倫理的配慮

本調査は強制ではないこと、不快を感じる事等があった場合には回答を途中で中断することができ、その場合にも協力者が不利益を被ることはないこと、得られたデータは統計的に処理し個人が特定されることはないこと、研究以外の意図でデータを使用することはないことをアンケート冒頭の文面で説明した。そして、それらに同意した上で質問に回答するよう説明文を提示し、質問紙への自発的参加、守秘義務について協力者が同意した上で実施された。

## 結果

### (1) 因子分析

本研究で使用した尺度は、いずれも子どもを対象としていたため、本研究では教示文を改変し親を対象として用いた。そのため、本研究においてもそれぞれの尺度について因子分析を行った。

## 1) 子どもへの期待尺度

全30項目に対して、最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析を行った。固有値の減衰状況（第1因子から第5因子まで、9.49、4.86、1.64、1.27、1.01）と項目の内容を考慮し、4因子を基準とした因子分析（最尤法、プロマックス回転）を再度行った。各項目の因子負荷量を確認し、因子負荷量.35以下の項目や、2つの因子への負荷量が.35以上の項目を除外しながら因子分析を繰り返し行った結果、最終的に25項目に対して3因子を抽出した（Table 1）。

第1因子は、「人に優しくしてほしい」、「思いやりを持ってほしい」といった項目からなっており、子どもの人間性に対する期待であることから「人間性期待」と命名した。第2因子は、「いい高校・大学に行ってほしい」、「いい企業に就職してほしい」など、進学や就職への期待であることから「進路期待」と命名した。第3因子は、「ほかの子と比較して優れてい

てほしい」、「親の言うとおりにしてほしい」といった他者と比較して優れていることや親に従順であることへの期待であることから「よい子期待」と命名した。

また、3つの下位尺度の内的整合性について検討するために、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、「人間性期待」 $\alpha=.90$ 、「進路期待」 $\alpha=.88$ 、「よい子期待」 $\alpha=.85$ であった。

## 2) 母親の問題解決パターン

全30項目について、最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析を行った。さらに、固有値の減衰状況（第1因子から第6因子まで、7.27、4.45、2.36、1.54、1.24、1.05）と項目の内容を考慮し、6因子を基準とした因子分析（最尤法、プロマックス回転）を再度行った。各項目の因子負荷量を確認し、因子負荷量.35以下の項目や、2つの因子への負荷量が.35以上の項目を除外しながら因子分析を繰り返し行った結果、最終的に26項目に対して6因子を抽出した（Table

Table 1 子どもへの期待尺度因子分析結果（最尤法・プロマックス回転）

	人間性期待	進路期待	よい子期待
18 人に優しくしてほしい	<b>.84</b>	-.19	.04
14 思いやりを持ってほしい	<b>.78</b>	-.04	-.12
8 よい人間関係を作ってほしい	<b>.73</b>	.06	-.02
17 自分のやりたい仕事を見つけてほしい	<b>.72</b>	-.01	-.13
19 自分のことは自分で責任を持ってほしい	<b>.71</b>	-.03	-.02
10 自分の意見を言える人になってほしい	<b>.67</b>	-.04	.05
28 多くの友人関係を築いてほしい	<b>.59</b>	-.01	.11
30 くじけず、負けない人間になってほしい	<b>.59</b>	.20	.00
7 正直でいてほしい	<b>.58</b>	-.05	-.01
27 自分の満足のいく生き方をしてほしい	<b>.57</b>	.04	-.11
15 立派な社会人になってほしい	<b>.56</b>	.27	.07
12 何事にも積極的になってほしい	<b>.54</b>	.13	.06
9 夢を追い続けてほしい	<b>.39</b>	-.07	.22
2 いい高校・大学に行ってほしい	-.17	<b>.97</b>	-.09
3 いい企業に就職してほしい	-.09	<b>.93</b>	-.05
6 賢くあってほしい	.18	<b>.61</b>	-.05
29 良い成績をとってほしい	.03	<b>.56</b>	.32
21 勉強ができる子であってほしい	.04	<b>.56</b>	.24
4 倫理観を持ってほしい	.02	<b>.55</b>	-.17
13 業績の良いところに就職してほしい	.14	<b>.47</b>	.21
25 ほかの子と比較して優れていてほしい	-.06	.03	<b>.86</b>
24 親の言うとおりにしてほしい	-.06	-.20	<b>.85</b>
26 他人に誇れる肩書きであってほしい	-.06	.11	<b>.80</b>
16 親の言う事をきいてほしい	.16	-.13	<b>.68</b>
1 何に関しても一番になってほしい	-.08	.20	<b>.44</b>
因子間相関			
	人間性期待	—	.20
	進路期待	—	.67
	よい子期待	—	—

2)。

因子分析の結果抽出された6因子に含まれる各項目に基づき、因子の命名をした。第1因子は、「この状況に関する話ばかりする」、「混乱して解決に向けた話が出来ない」といった項目から成っており、問題に動揺し混乱していることから、「混乱」と命名した。第2因子は、「何が原因かを話し合う」、「解決に向けた話し合いをする」といった項目から成っており、解決に向けて具体的な取り組みをすることから「問題焦点」と命名した。第3因子は、「家族で意見や判断を一致させる」、「家族全員で話し合い協力する」といった項目から成っており、家族が一緒になって取り組むことから「家族協力」と命名した。第4因子は、「何

事もなかったかのように振る舞う」、「この状況について直接触れずに見守る」といった、問題を直視しない態度であることから「回避」と命名した。第5因子は、「どうしたら良いかを子どもに決めさせる」、「子どものやりたいようにさせる」といった項目から成っており、子どもの主体性を尊重して解決を試みることから「子ども主体」と命名した。第6因子は、「子どもに指示や命令をする」、「家族の誰かの意見に子どもを従わせる」といった、子どもに対して指示や命令をする態度であることから、「指示・命令」と命名した。

また、6つの下位尺度の内的整合性について検討するために、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、「混乱」 $\alpha=.84$ 、「問題焦点」 $\alpha=.84$ 、「家族協力」 $\alpha=.68$ 、

Table 2 家族の問題解決パターン尺度因子分析結果 (最尤法・プロマックス回転)

	混乱	問題焦点	家族協力	回避	子ども主体	指示・命令
29 この状況に関する話ばかりする	<b>.79</b>	-.09	.11	-.19	.02	.09
27 混乱して解決に向けた話が出来ない	<b>.78</b>	-.12	.08	.16	.02	-.19
30 心配や不安であることを態度や言葉で示す	<b>.76</b>	.13	-.08	-.30	.03	-.01
21 子どもと葛藤的になる	<b>.67</b>	.14	-.01	.14	-.08	-.01
28 家族の誰かのせいにする	<b>.65</b>	-.07	-.08	.09	-.01	.11
18 落ち込んでいることを態度や言葉で示す	<b>.51</b>	.04	.05	.04	.04	.05
20 自分(親)のせいであると言う	<b>.44</b>	.04	-.02	.20	.11	-.12
9 何が原因かを話し合う	.05	<b>.97</b>	-.11	.06	-.06	.04
10 解決に向けた話し合いをする	.04	<b>.96</b>	-.03	.02	-.07	.04
19 この状況の解決に役立ちそうな情報を与える	.02	<b>.56</b>	.01	-.08	.03	.10
14 子どもの話をきく	-.11	<b>.45</b>	.12	.04	.07	-.34
13 お互いに気持ちや考えを言う	.03	<b>.45</b>	.23	-.05	.06	-.10
5 子どもがこの状況を乗り越えられるようはげましや手助けをする	-.06	<b>.42</b>	.21	-.02	.20	.10
15 家族で意見や判断を一致させる	-.01	-.02	<b>.66</b>	.04	-.05	.05
4 家族全員で話し合い協力する	-.05	.03	<b>.63</b>	-.08	.10	.06
24 家族で役割を分担し、子どもに関わる	.02	-.02	<b>.62</b>	.06	-.07	.06
26 親が中心となって解決に向けて取り組む	.17	.16	<b>.43</b>	.01	-.18	.03
22 何事もなかったかのように振る舞う	-.10	.09	-.04	<b>.80</b>	.02	.05
25 この状況について直接触れずに見守る	.02	-.02	.04	<b>.71</b>	-.03	-.07
17 この状況についての話題を避ける	.12	-.17	.08	<b>.50</b>	.06	.09
2 どうしたら良いかを子どもに決めさせる	.02	.02	-.11	.01	<b>.80</b>	.13
1 子どものやりたいようにさせる	.08	-.09	-.02	-.02	<b>.80</b>	-.08
6 子どもの提案に応じる	-.03	.24	.04	.08	<b>.43</b>	-.03
7 子どもに指示や命令をする	.04	.17	.00	-.05	.01	<b>.70</b>
3 家族の誰かの意見に子どもを従わせる	-.03	-.08	.21	.02	.04	<b>.65</b>
8 子どもを非難したり不満を言う	.26	.06	-.10	.14	-.01	<b>.49</b>
因子間相関						
	混乱	—	.01	.50	-.15	.62
	問題焦点		—	.57	.23	-.26
	家族協力			—	.23	-.11
	回避				—	.29
	子ども主体					—
	指示・命令					



「回避」 $\alpha=.74$ 、「子ども主体」 $\alpha=.70$ 、「指示・命令」 $\alpha=.70$ であった。

(2) 相関分析

子どもへの期待尺度および問題解決パターン尺度の各下位尺度の合計得点を項目数で割って平均値を算出し、これを下位尺度得点とした。下位尺度得点の平均値と標準偏差を Table 3 に示す。

これら下位尺度得点を用いて Pearson の相関係数を算出した (Table 4)。その結果、子どもへの期待と問題解決パターンとの間には相関が見られた。

まず、「人間性期待」と「問題焦点」、「家族協力」、「子ども主体」との間には弱～中程度の正の相関が見られた ( $r=.15\sim.53, p<.001\sim.01$ )。対して「混乱」、「回避」、「指示・命令」との間には、弱い負の相関が見ら

Table 3 各下位尺度得点の平均値・標準偏差 (n=480)

	平均値	標準偏差
子どもへの期待尺度		
人間性期待	4.27	.47
進路期待	3.49	.71
よい子期待	2.72	.75
家族の問題解決パターン尺度		
混乱	2.60	.79
問題焦点	4.70	.73
家族協力	3.93	.79
回避	2.80	.88
子ども主体	3.96	.73
指示・命令	2.52	.85

れた ( $r=-.21\sim-.16, p<.001$ )。次に、「進路期待」と「混乱」、「問題焦点」、「家族協力」、「指示・命令」との間には弱い正の相関が見られた ( $r=.15\sim.17, p<.001$ )。そして、「よい子期待」と「混乱」、「家族協力」、「回避」、「指示・命令」との間には弱～中程度の正の相関が見られた ( $r=.16\sim.42, p<.001$ )。

(3) 期待クラスタと問題解決パターンとの関連

子どもへの期待の類型を検討するために、「人間性期待」、「進路期待」、「よい子期待」の z 得点を変数としたクラスタ分析を行った (Ward 法)。クラスタ数の検討には、デンドログラムを基準に各クラスタに含まれる被験者数やクラスタの解釈可能性の観点から検討し、3 クラスタを採用した (Figure 1)。

第 1 クラスタは、「人間性期待」が高く「よい子期待」は低いことから「人間性期待群」と命名した (n=111)。第 2 クラスタは、すべての期待の標準得点の平均が 0.00SD 以下の値を示していることから「期待低群」と命名した (n=172)。第 3 クラスタは、すべての期待の標準得点の平均が 0.00SD 以上の値を示していることから「期待高群」と命名した (n=197)。

次に、子どもへの期待の類型 3 群を独立変数とし、問題解決パターン尺度の下位尺度得点を従属変数とした一要因分散分析を行った (Table 5)。その結果、「混乱」得点 ( $F(2,477)=22.68, p<.001$ )、「問題焦点」得点 ( $F(2,477)=33.06, p<.001$ )、「家族協力」得点 ( $F(2,477)=16.16, p<.001$ )、「回避」得点 ( $F(2,477)=17.20, p<.001$ )、「指示・命令」得点 ( $F(2,477)=20.89, p<.001$ ) において有意差が認められた。そのため、Tukey 法による多

Table 4 下位尺度因子の相関分析 (n=480)

	混乱	問題焦点	家族協力	回避	子ども主体	指示・命令
人間性期待	-.21***	.53**	.24***	-.19***	.15***	-.16***
進路期待	.15***	.15***	.17***	.08	-.03	.16***
よい子期待	.42***	-.00	.16***	.27***	-.06	.40***

\*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$

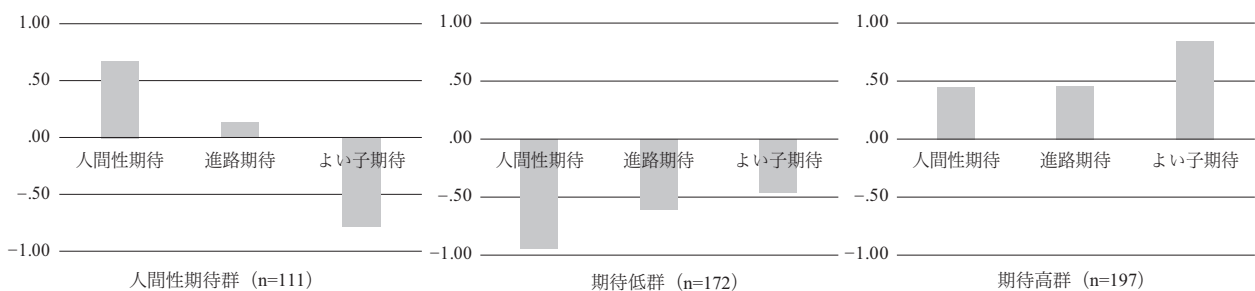


Figure 1 子どもへの期待クラスタ

Table 5 各クラスにおける問題解決パターン尺度の下位尺度得点分散分析 (n=480)

	人間性期待 (n=111)		期待低 (n=172)		期待高 (n=197)		F 値	多重比較 (Tukey 法)
	M	SD	M	SD	M	SD		
混乱	2.20	0.65	2.63	0.74	2.80	0.81	22.68***	高, 低>人間性
問題焦点	5.04	0.54	4.37	0.73	4.80	0.70	33.06***	人間性>高>低
家族協力	4.12	0.86	3.67	0.74	4.06	0.74	16.16***	人間性, 高>低
回避	2.39	0.82	2.87	0.80	2.96	0.91	17.20***	高, 低>人間性
子ども主体	3.99	0.74	3.93	0.68	3.96	0.76	.29	n.s
指示・命令	2.10	0.76	2.54	0.77	2.73	0.89	20.89***	高, 低>人間性

\*\*\* $p<.001$ 

重比較を行った。その結果、「混乱」得点は、「期待高群」( $p<.001$ )と「期待低群」( $p<.001$ )が「人間性期待」よりも有意に高かった。「問題焦点」は、「人間性期待群」が「期待高群」( $p<.01$ )と「期待低群」( $p<.001$ )よりも有意に高く、「期待高群」が「期待低群」( $p<.001$ )よりも有意に高かった。また「家族協力」は、「人間性期待群」( $p<.001$ )と「期待高群」( $p<.001$ )が「期待低群」よりも有意に高かった。「回避」は、「期待高群」( $p<.001$ )と「期待低群」( $p<.001$ )が「人間性期待群」よりも有意に高かった。最後に「指示・命令」は「期待高群」( $p<.001$ )と「期待低群」( $p<.001$ )が「人間性期待群」よりも有意に高かった。

## 考 察

本研究は、子どもが問題を呈した状況を想定してもらい、子どもへの期待と母親の問題解決パターンとの関連を検討した。

### (1) 期待と問題解決パターンとの関連

子どもへの期待尺度および問題解決パターン尺度の下位尺度因子の Pearson の相関係数を算出した結果、「人間性期待」と「問題焦点」、「家族協力」、「子ども主体」との間に弱～中程度の正の相関が見られ、「混乱」、「回避」、「指示・命令」との間には、弱い負の相関が見られた。このことから、子どもの人間性を期待していると、子どもを主体として問題解決に具体的に取り組み、かつ家族がサポートをしていく傾向があることがわかる。反対に、問題に対して回避したり、親が主導する対処方略は取られにくいことが示された。「人間性期待」因子の項目を見ると、「自分のやりたい仕事を見つけてほしい」や「自分のことは自分で責任を持ってほしい」といった項目、「自分の満足のある生き方をしてほしい」といった項目が含まれている。すなわち、人間性への期待とは、子どもが外的評価によらず主体的に自己決定をすることで満足度の高い人

生を歩むことへの期待であることがうかがえる。それゆえ、人間性期待が高くなると、問題状況も子ども自身が解決し乗り越える課題として意味づけることで、子どもを主体として家族が支えていく関わり方になると考えられた。

また、「進路期待」と「混乱」、「問題焦点」、「家族協力」、「指示・命令」との間に弱い正の相関が見られた。子どものより良い進学や就職を期待している場合、子どもに問題が生じると期待しているコースから外れることへの不安や焦り等から「混乱」が生じると予想される。しかし、元のコースに戻すために問題に焦点を当てて家族が協力して取り組む傾向があると考えられる。一方で、子どもに望むコースを歩ませようと指示的、命令的な関わり方をする傾向もあることが考えられた。

そして、「よい子期待」と「混乱」、「家族協力」、「回避」、「指示・命令」との間に弱～中程度の正の相関が見られた。この結果から、よい子期待が高くなるほど、子どもに問題が生じた際に混乱する傾向があることがうかがえた。また「進路期待」と同様に、子どもの問題に対して家族が協力したり、指示的、命令的な対処をとる傾向も見られたが、一方で回避傾向も高くなることが示された。子どもの問題に対して話し合ったり、指示・命令といった直接的な対処をしたり、回避したりするなど、対応が一貫せずに行われていることも考えられる。

### (2) 期待の種類と問題解決パターンとの関連

子どもへの期待の種類3群を独立変数とし、問題解決パターン尺度の下位尺度得点を従属変数とした一要因分散分析を行った結果、「混乱」、「問題焦点」、「家族協力」、「回避」、「指示・命令」において有意差が認められた。

多重比較の結果、「問題焦点」と「家族協力」は、「人間性期待群」と「期待高群」が「期待低群」より

も有意に高く、さらに「問題焦点」では、「期待高群」が「期待低群」よりも有意に高いことが示された。このことから、人間性期待が高い程、問題について話し合ったり、家族で一致して問題に取り組むことが見出された。反対に、「混乱」、「回避」、「指示・命令」においては「期待高群」と「期待低群」が「人間性期待群」よりも有意に高いことが示された。「期待高群」・「期待低群」は「人間性期待群」と比較し、「人間性期待」が低く、「よい子期待」が高い。このことから、人間性期待が低く、よい子期待が高い場合、問題が生じると混乱したり、回避したり、子どもに対して指示・命令をすることで統制的な対処をする傾向があることが示唆された。春日ら（2014）は、進路・よい子期待重視群の子どもは、期待低群や人間性期待重視群の子どもよりも、親からの期待に対して反発反応や負担反応が高いことを指摘している。本研究の結果とも合わせると、親が子どもへよい子期待を抱くほど、よい子像に合致しない子どもの行動を受け入れることができず統制しようとするために、子ども側は反発したり負担感を抱くことが推察される。

以上の結果から、子どもに対する期待は、子どもが問題を呈した際の関わり方に反映されていることが示された。特に、子どもに対して人間性への期待が高いか、よい子期待が高いかによって子どもの問題への反応が異なることが明らかにされた。子どもに問題が発生した際、子どもの受容に困難を抱えていたり、葛藤状態にある母親において、子どもへの期待を理解し、期待の変容を促すことで関わり方が変化していくことも考えられる。

しかしながら本研究は、不登校初期に見られやすい身体愁訴の子どもを想定してもらい回答を求めた。だが実際に我が子が不登校となった場合では、本調査で回答したような対応ではないことも考えられる。さらに、回答には社会的望ましさも反映されているだろう。今後は、より実際の場面における対応や、他の問題状況について検討する必要がある。

## 注

\* 愛知県立大学教育福祉学部准教授

## 引用文献

- Briley, D. A., Harden, K. P., & Tucker-Drob, E. M. (2014). Child characteristics and parental educational expectations: Evidence for transmission with transaction. *Developmental psychology*, 50(12), 2614–2632.
- Castro, M., Expósito-Casas, E., López-Martín, E., Lizasoain, L., Navarro-Asencio, E., & Gaviria, J. L. (2015). Parental involvement on student academic achievement: A meta-analysis. *Educational research review*, 14, 33–46.
- Englund, M. M., Luckner, A. E., Whaley, G. J., & Egeland, B. (2004). Children's achievement in early elementary school: Longitudinal effects of parental involvement, expectations, and quality of assistance. *Journal of educational psychology*, 96(4), 723–730.
- 藤目文子・東條光彦・鈴木伸一. (2008). 親の期待認知が高校生の強迫傾向に及ぼす影響 (原著). *行動療法研究*, 34(2), 127–135.
- Froiland, J. M., & Davison, M. L. (2014). Parental expectations and school relationships as contributors to adolescents' positive outcomes. *Social Psychology of Education*, 17(1), 1–17.
- 池田幸恭. (2018). 青年と親からみた親の期待のあり方に関する探索的検討. *和洋女子大学紀要*, 58, 49–60.
- 春日秀朗・宇都宮博. (2011). 親からの期待が大学生の自尊感情に与える影響. *立命館人間科学研究*, 22, 45–55.
- 春日秀朗・宇都宮博・サトウタツヤ. (2014). 親の期待認知が大学生の自己抑制型行動特性及び生活満足感へ与える影響：期待に対する反応様式に注目して. *発達心理学研究*, 25(2), 121–132.
- 河村照美. (2003). 親からの期待と青年の完全主義傾向との関連. *九州大学心理学研究*, 4, 101–110.
- 前田利江・鈴木美樹江. (2020). 思春期不登校の子どもをもつ母親の心理変容過程についての一考察. *心理臨床学研究*, 37(6), 537–548.
- 松本訓枝. (2004). 母親たちの家族再構築の試み「不登校」児の親の会を手がかりにして. *家族社会学研究*, 16(1), 32–40.
- 中山勘次郎. (1992). 子どもに対する母親の期待とその発達の傾向. *上越教育大学研究紀要*, 11(2), 1–12.
- Pinquart, M., & Ebeling, M. (2020). Parental educational expectations and academic achievement in children and adolescents—a meta-analysis. *Educational Psychology Review*, 32(2), 463–480.
- 渡部雪子・新井邦二郎・濱口佳和. (2012). 中学生における親の期待の受け止め方と適応との関連. *教育心理学研究*, 60(1), 15–27.
- 渡部雪子・濱口佳和・新井邦二郎. (2014). 中学生における親の期待の認知と外的適応の関連. *カウンセリング研究*, 47(3), 127–136.
- 山口素子. (1989). 男性性・女性性の2側面についての検討Ⅱ 自己期待と他者期待. *心理学研究*, 59(6), 350–356.